

2019年の図書館状況と図書館小説

日本語日本文化学科 教授

佐藤 毅彦

1. はじめに

2019年5月に、映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』（以下『ニューヨーク公共図書館』）が公開され、その中で描かれている、図書館の運営や利用状況が話題となった。1) たとえば、図書館とは関連性が希薄な雑誌に掲載されたあるエッセイでも、「この図書館の理念は『公共（＝ここにいてるすべての人）のために、必要な知識や情報はなんでも提供する』ということなのだ」と、紹介されている。2)

映画よりも多くの人々が視聴したと思われる、テレビドラマ『ルパンの娘』は、2019年7月～9月、フジテレビ系列で、放送された。警察に勤める人物と泥棒一家に育った女性との恋愛が描かれたが、ヒロインの「三雲華」（女優：深田恭子が演じた）は、図書館に勤務しているという設定だった。撮影は、飯能市立図書館（埼玉県）で、行われている。3) その原作となった小説が、横関大『ルパンの娘』4)だが、「この四谷にある区立図書館で働くようになって二年がたつ。華は司書の資格を持っているが、ここでは派遣社員として働いている。公立図書館の正規司書というのは狭き門だ。だが派遣社員といっても正規と変わらない業務を任されることもあるし、華は今の職場に満足している」（p.117）とあり、現状を反映するように、「司書資格のある派遣職員」として、図書館で働いている、という設定になっている。

ストーリーの中では、「貸出用の本などの管理システムは二年ほど前に導入されたもので、大手通信機器メーカーが自治体向けに開発したパッケージソフトだ。検索画面に名前や生年月日を入力すれば、人の名前が一覧となって画面に出る。その人の名前をクリックすると、その人の登録情報はもちろん、過去に借りた本の書名なども見ることができる」（pp.149-150）とあり、交際している男性の名前で検索したが、検索結果に出てこないで、その祖父の名前で検索し、「借りていた本に履歴を表示させる」。「祖父に頼まれ、本を返却するためにこの図書館に足を運んでいたということだ」（p.151）といった、利用履歴に図書館員がアクセスして参照する場面が含まれている。

一方、すでに発表されてから40年以上になる小説で、現代の図書館を舞台としているという意味での問題ではないのだが、2019年に刊行された作家研究の著書の中で、作品が引用され、その中に図書館の描写がみられる例がある。嵯峨景子『氷室冴子とその時代』5)では、1980年代に多くの読者に読まれた作家である、氷室冴子のデビュー作『さようならアルカン』6)に、次のようなシーンがあることを紹介している。

女子高校生の「<私>は中学時代に集めた真琴の図書カードをたよりに彼女の読書歴を追いかけていた。真琴が読んでいた本を図書室で探す」という行動が描かれ、友人と『手に

古いカード持っているけど、『銀の匙』をぬかして、次のを借りればいいのに』『順を追わなくちゃだめなのよ』『彼女の読書カードの順を追ってゆきたい自分の心を、私はどうすることもできないのだ』『愛する人の図書カードを追ってゆくなんで、ずいぶんと古風で情熱的だな』『これは中学時代の同級生のものよ。しかも女の子の』(p.61-62)という会話を交わしている。

嵯峨景子は『さようならアルルカン』は学校という場を舞台に、思春期の少女の自意識のありようを描いた作品である。『小説ジュニア』掲載の小説の多くが男女の恋愛をモチーフにしているのに対し、同性との関係をテーマに据え、少女の繊細な感情に焦点を当てた氷室作品は、異彩を放つものであった」(pp.63-64)と論評しているが、作品が発表された年代(雑誌『小説ジュニア』1977年11月号に発表、『さようならアルルカン』集英社コバルト文庫、1979.12、に収録)を考慮したのか、学校図書館の運用などは著者の関心領域の範囲外であるためなのか、図書館でのプライバシーの扱いや、他の生徒の利用履歴を本人の知らないところで追いかけていることの問題性については、とくに言及していない。

(ここで示したページは『氷室冴子とその時代』の掲載ページ)

注)

1)映画の公式 HP では、キャリー・ウェルチ(ニューヨーク公共図書館幹部役員)と日本の図書館関係者とのディスカッション:日比谷図書文化館 2019.4.9、スペシャルトーク<図書館のプロが見た『ニューヨーク公共図書館』そして日本の図書館の未来>:岩波シネサロン 2019.6.6、などが開催されたことが、案内されている。

(<http://moviola.jp/nypl>)

また、『図書館雑誌』では、2020年6月16日(日)に、大阪市立中央図書館大会議室で開催されたトークイベントの様子が紹介されている。

西尾真由子「大阪市立図書館×映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』トークイベント「借りるだけではもったいない!『もっと』使える!図書館」実施報告」『図書館雑誌』Vol.114、no.1、2020.1、pp.22-23

2)渡邊十絲子「公共施設としての競艇場」『マクール』2019.10、p.149

このエッセイでは、次号・次々号でも、この映画を取り上げ、競艇(ボートレース)の状況と比較させて論じている。

渡邊十絲子「新・レース場コミュニティ活用法」『マクール』2019.11、p.149

渡邊十絲子「ドキュメンタリー映画が心をとらえた」『マクール』2019.12、p.145

3)『ルパンの娘』公式 HP

(<http://fujitv.co.jp/Lupin-no-musume/>)

ロケ地については、多数の媒体で扱われているが、たとえば、下記。

『ルパンの娘』で注目 癒し求めて人々が集まる埼玉飯能市立図書館『毎日新聞』2019.10.11

(<https://mainichi.jp/articles/20191011/k00/00m/040/038000c>)

4)横関大『ルパンの娘』講談社（文庫）、2017←講談社、2015

5)嵯峨景子『氷室冴子とその時代』小鳥遊書房、2019

同書では、「学校読書調査に氷室冴子の名前が初めて登場するのは一九八二年」（p.165）
「一九八五年は、氷室冴子作品が最も多く学校読書調査に登場した年」（p.166）などと記述されている。

同じ著者により同時代の少女小説の状況を分析した、以下の著作がある。

嵯峨景子『コバルト文庫で辿る少女小説変遷史』彩流社、2016

また、下記の氷室冴子を扱った文献の中で、嵯峨景子は、「氷室冴子論」を寄稿している。

『文藝別冊 氷室冴子 私たちが愛した永遠の青春小説作家 没後 10 周年記念特集』河出書房新社、2018、収録

嵯峨景子「氷室冴子論 氷室冴子 忘れえぬ作家の軌跡」pp.192-197

6)氷室冴子「さようならアルルカン」『小説ジュニア』集英社、1977.11

氷室冴子『さようならアルルカン』集英社コバルト文庫、1979

先に引用した部分は、この文庫本の pp.18-21 に掲載されている。

2. 2019 年の図書館小説—『夢見る帝国図書館』 1)

小説『夢見る帝国図書館』は、電子雑誌『別冊文藝春秋』に発表された。2019 年 5 月に単行本として刊行されると、日刊新聞の全国紙 5 紙や週刊誌の書評でとりあげられ、あらためて、活字メディアで「図書館」に対する一定の関心が存在していることを示した。2)小説の構成やストーリー全体についての分析は、多数発表されている書評などですでに論じられており、他に譲るが、本稿の後半との関係で、登場人物が子どもの時期における図書館との関係性について、描写されている場面を取り上げる。

この小説の主人公である「わたし」が「フリーランスの雑誌記者」をしていたころ知り合った人物である「喜和子さん」について、「喜和子さんと知り合ったのは、かれこれ十五年ほど前」（p.3）で「全面開館した国際子ども図書館を取材した帰り」（p.4）のこととされている。その後「季刊の雑誌で、子ども図書館に通う仕事ができ」「喜和子さんとも三月に一ぺんくらいの頻度で会うようになった」。「喜和子さんは当時、六十歳くらい」（p.24）とある。3)

国際子ども図書館については「『あの建物が何歳だか知ってる?』」「『一九〇六年に完成したから、もうすぐ百年になるんですってね』」（p.25）という会話を交わしている。国際子ども図書館の新装全面開館は、2002 年のことなので、喜和子さんは 1940 年代前半の生まれで、この時点（2002 年）において、60 歳前後になっていると、推定できる。

その喜和子さんについて、「小さいころから本好きだった彼女は、学校図書館に新しい本が入ると、誰より先に借り出して読んだものだった。ある日、いつものように、司書の先生がラベルを貼ったばかりの新しい本を手当たり次第に眺めていると、その中に薄い小冊子

のようなものが何冊かあって、ページをめくるとざらざらした手触りの紙に青いインクで絵と文章が印刷されていた」「その中の一冊が、とりわけ彼女の心に響いた」(p.198)と描写されている。1940年代前半に生まれた「喜和子さん」が、学校に通っていた時期というのは、1950年代～60年代前半のころかと思われる。司書教諭の発令について定めた「学校図書館法」の成立は1953年だが、附則で発令が猶予されたこともあり、この当時、大多数の学校に「司書の先生」は存在しておらず、資料収集にける予算の関係で「いつものように」と形容されるほど、ひんぱんに新しい本が供給されることもなかったのではないか。ここで紹介されている状況は、たとえば、現代の公共図書館の児童コーナーなどでみられるサービスに近く、職員配置や資料費の状況から、現在でも、すべての学校で提供されているとはいきれないものである。

この小説は、巻末の「謝辞」にあげられている『上野図書館八十年略史』『国立国会図書館三十年史』をはじめ、多数の文献を参照して執筆されている。作者も「ネット上のものも含め、さまざまな文献のお世話になりました。小説内に登場する先行作品、先行研究に、この場を借りて深く、厚くお礼申し上げます」と謝辞に記している。4)

「この作品はフィクションであり、創作の責任はすべて著者に帰します」と言われるまでもなく、現実の状況と乖離がみられることを、ことさら問題視しようというわけではないが、たとえば、1950・60年代の学校図書館の実態などは、そのイメージが広く伝わっているとはいいがたい状況にあるといえるのではないか。

注)

1)中島京子『夢見る帝国図書館』文藝春秋、2019.5

2) (著者インタビュー)「一進一退、自由と権利のために 中島京子さん『夢見る帝国図書館』 興野優平『朝日新聞』2019.6.26 (夕刊)

『夢見る帝国図書館』人生に歴史が絡む奇想の愉悦」評者:諸田玲子、『朝日新聞』2019.7.6

『夢見る帝国図書館』…中島京子著 樋口一葉に恋をする」評:山内志朗(倫理学者 慶応大教授)『讀賣新聞』2019.7.21

「今週の本棚 『夢見る帝国図書館』中島京子・著 物語の種子を宿した玉手箱」評・鴻巣友季子『毎日新聞』2019.6.2

「読書 歴史追い未来の抛り所示す『夢見る帝国図書館』中島京子・著」評・小山田浩子(作家)『日本経済新聞』2019.6.22

「書評『夢見る帝国図書館』知の集積場愛した人々」評・関口苑生(書評)『産経新聞』2019.6.23

「書評『夢見る帝国図書館』評・伊藤氏貴(文芸評論家)『東京新聞』2019.6.16

「今週の一冊 図書館の歴史と女性の人生が交錯する 『夢見る帝国図書館』中島京子」評者・蜂飼耳(詩人・作家)『週刊朝日』2019.7.19、p.64

「今週の新刊 『夢見る帝国図書館』中島京子」評・岡崎武志『サンデー毎日』2019.6.23、

p.114

「文春図書館推薦 『夢見る帝国図書館』 中島京子」『週刊文春』 2019.6.13、p.119

『人生を自由にする』図書館が主人公の物語 『夢見る帝国図書館』 レビューアー・佐久間文子（文芸ジャーナリスト）『週刊新潮』 2019.6.27

（この項目で、評者が表示されていないものは、無署名記事）

3)上記の「今週の本棚 『夢見る帝国図書館』 中島京子・著 物語の種子を宿した玉手箱」評・鴻巣友季子『毎日新聞』 2019.6.2、p.10、では、「国際子ども図書館」の「取材にきた『わたし』は喜和子という六十代の女性と出会う」とされている。

4)「謝辞」には、「この作品を書くにあたり、国立国会図書館国際子ども図書館に、貴重な資料をご提供いただきました」と記されている。

3. 2019年刊行の児童文学に描かれた図書館

前章では、小説『夢見る帝国図書館』で、児童を対象とする学校図書館での状況が描かれたケースについてみてきたが、児童向けのフィクションの中では、どうだったのか。事例として、児童文学関係の受賞歴のある作家の作品を取り上げ、比較対象として、翻訳作品で2019年に出版され、話題となったものとあわせて、検討した。

3-1. 市川朔久子『しずかな魔女』1)

表紙カバーには、「草子は、はじめて図書館でレファレンスを希望した。<「しずかな子は、魔女に向いている」という文章の出てる本を探しています> やがて司書の深津さんから渡されたものは、白い紙の束。それは、ふたりの少女のまぶしい、ひと夏の物語だった——。」と記されている。

○不登校の主人公と図書館

「図書館のいつもの席に腰を下ろすと、瀬尾草子は、かばんからノートを取り出した。新しい白いページに、今日の日づけと時間を記す。とくに意味はない。ただ、書くと少しだけ安心するのだ」(p.6)。「午前九時、開館とともに大きなガラスの扉を押し開けなかに入ると、フロア奥のお気に入りの席を確保するのが、このところの草子の日課だった」(p.7)とあるように、学校に行かず、図書館ですごしている女子が、主人公である。

そんな彼女だが、「<学校に行きたくない子は、図書館にいらっしやい>そんな呼びかけを目にしたのは、ネットの片すみだったろうか、それとも朝のテレビ番組だったろうか。どこで見たかもあいまいなのに、こまったときふと心に浮かんだのは、もしかしてどこかで予感していたせいかもしれない。その細い糸をたぐるようにして、草子はいまここにいる。ここだけが居場所だった」(pp.9-10)という。

○図書館の職員 深津さんとの出会い

「朝から図書館で過ごしていた」日に、「いま読んでいるシリーズの四巻が、ずっと貸し出し中のまま」で、書棚にもないので、蔵書検索を試みる。「そのときカラカラと音がして、棚のかけから小さなカートを押した女の人が現れた。図書館の人が返ってきた本を棚に

もどしているのだ。緑色のエプロンを着けたまだ若いその人は、草子に目だけで軽く礼をすると、カートに載った本を一冊一冊ていねいに棚にもどしはじめた。草子は「一瞬ためらい、思い切って声をかけた。『……あの』『はい?』感じのよい表情にほっとして先をつづける」。四巻について尋ねると、カウンターで確認して『よろしければ、他館から取りよせもできますよ。貸出カードをお持ちならすぐに手続きできますので、お申しつけくださいね』そう言ってにっこりとほほえんだ。「取りよせを頼んだ本は、三日後にはやってきた。これで心残りなく最終巻に進むことができる。貸し出しの手続きをしてくれたのも、あのときの女の人だった」(pp.10-12)。

この女性は「深津さん」と、ほかの職員が呼んでいた。「彼らはみなそろいのエプロンを着けて、しずかに歩きおだやかな声で話す。『司書』という仕事があるのを、草子はここに通いだしてはじめて知った」(p.12) という。

たびたび顔を合わせた「彼女の態度がこれまでと変わることはなかった。草子はほっとした。親しげに笑いけられたり、話しかけられたりしなくてよかった。そんなのはいない。『親切』なんかいない」。草子は、幼稚園のとき、運動会でころんで、そのときに、ある先生が草子の手をつかんで走り出し、拍手喝采を受けてゴールしたことがあった。その後「草子はひとり手洗い場に行き、水道で手を洗った。なんどもなんども」(p.13) という経験をしていた。

草子は、シルバーサークルの人から、『学校はどうしたの?』ひさしぶりに、真正面からそう問われた。まったく知らない人だった『フトウコウなの?』『親御さんは、そのことなにもおっしゃらないの?』。「草子の頭のなかが、怒りと不快感でいっぱいになる」「言葉がうずまき、胸が苦しくなる」(pp.16-18) という状況になる。深津さんが話しかけてきて、新着コーナーに案内し、以前、草子が検索していたシリーズの外伝を紹介する。涙がこみあげてきた草子を、職員用の階段のところへ連れて行き、『この本は、取り置きにしておきますね』それだけ言って、しずかにドアを閉めた」(p.19)。深津さんは、シルバーサークルの人の関心を草子からそらして、対応してくれたが、草子は、『……ありがとうございました』『すみません、ほんとはもっと、ちゃんとお礼を……あの、ごめんなさい。わたし、うまく』ああ、まただ。ひくっ、とのどが鳴る」という状態になる。「深津さんは少し考えてから、エプロンの胸ポケットからペンを取り出した。『いい?』と言うように草子を見ると、開いてあったノートのすみにさらさらと文字を書いた。<しずかな子は、魔女に向いてる> 『これ、お守りです。だから、だいじょうぶ』カチリと音を立ててペンをしまうと、またカートを押して行ってしまった」(pp.24-25)。

○図書館の決まり

この図書館で、草子は「本を読み、考えごとをし、ときどき勉強をした」。「入り口のところに『長時間の学習はご遠慮ください』と書いてある」(p.14) ので、「決まりを破ってここにいられなくなったらこまるし、もしも学校に連絡されたらもっとめんどうだ」と思っていた。ある日『この机って、勉強とかダメですかね? レポートちゃっちゃと終わらせて、

ついでに試験勉強もやりたいンスけど』と大学生くらいの若い男の人がたずねると図書館の職員は『たしかに、原則としてはそう書いてあります。でもまあ——今日みたいに空いてる日なら、だいじょうぶ。使用されて問題ないですよ』『あっ、そっすか。了解です』男子学生は軽く応えて向こうへ行ってしまった。耳をそばだてていた草子の肩から、ほっと力が抜ける。そうか。空いてればいいのか』(pp.13-14) と思った。

○図書館のレファレンスサービス

草子は、メッセージが気になり、本のことかと思って、図書館の棚を探す。「少なくとも、タイトルではなさそうだ。そうすると、本に出てくる一節ということになる。けれど、あまりに手がかりが少なすぎた。深津さんに、聞いてみようか。すがたを探すとカウンターのなかにいるのが見えた。だれかほかの人としゃべっている。そのときふと、いつもは見過ごす貼り紙が目飛び込んできた。<レファレンス——本を探すお手伝いをします>」とあった。草子は『すみません、本を探しているんですけど』カウンターの前に立つと、なかの人たちがさっと顔を上げた。ひるみそうになるのを、足にぐっと力を入れてその場に留まる』(p.27)。草子は、深津さんから受け取った、用紙に必要事項を記入してわたす。深津さんは、友人から教わった言葉だといいかけるが、草子が、「<しずかな子は、魔女に向いてる>という文章の出てる本を探しています』『お願いします。気になるんです、すごく。この言葉が』』という、「『少しお時間がかかりますが、よろしいですか?』『はい』『うけたまわりました』』そう言って、小さくうなずいてみせた』(pp.28-30)。

○作中作『しずかな魔女』

明日から夏休みという日、灰色の髪に眼鏡をかけた男の職員が、(草子は「館長」というあだ名をつけていた)「草子に大型の茶封筒をさし出して」「『これを深津から預かってきました』『なかから現れたのは、本ではなかった。白い紙の束だった』『お待たせしました。こちらが、お探しの物語です』『しずかな魔女』『それは、ふたりの女の子の、まぶしい夏休みの物語だった』』ということで、ストーリーのここまでが、いわば「導入」の部分であり、草子は、レファレンスサービスへの回答として、深津さんが、創作したと思われるストーリーを手渡される。それが、作中作の『しずかな魔女』であった。(pp.32-34)

この作中作の『しずかな魔女』(pp.36-158)の中で、四年生の女の子ふたりが、バスでおつかいにいき、「おつかいの内容は、図書館で予約していた本を受け取ってくること」で、「本をかかえて、ちょうどやってきたバスに乗りこんだ」。「詩の本と、字の小さな外国の小説と、それから大きな写真集。どれもごくふつうの、図書館の本」で、もとはただの、たばねた紙とインク「なのに、あらゆることが入ってる。知恵も、技術も、物語も。だれにだって会えるし、どこにだって行けるのよ。過去にも、未来にも、竜のいる場所にだって」というシーンがあった (pp.95-96)。

巻末には、もとのストーリーにもどり「気づけば、図書館のいつもの席で、いつもと同じように座っているのだった」(p.160) という草子の姿があった。

図書館員の深津さんは、草子をフォローし、「<しずかな子は、魔女に向いてる>という文

章の出てる本を探しています」というレファレンスをうけると、自ら創作したストーリーを草子に渡してくれるよう依頼する。『しずかな魔女』について「深津さんが書いてくれたんだ。この物語を」(p.161)と草子は感じる。

注)

1)市川朔久子『しずかな魔女』岩崎書店、2019

巻末には、「市川朔久子 福岡県生まれ。西南学院大学卒業。『よるの美容院』で第52回講談社児童文学新人賞受賞、同作でデビュー。『ABC!曙第二中学校放送部』が第49回日本児童文学者協会新人賞受賞、第62回青少年読書感想文コンクール課題図書に選出。『小やぎのかんむり』で第66回小学館児童出版文化賞受賞」と記されている。

3-2. 『ぼくが図書館で見つけたもの』2)

巻末には「本が好きで“図書館の主”^{ぬし}と呼ばれる達輝は、彩友から「本探し」をたのまれる。サッカー好きで本を読まない玲央に本をすすめるようにするうちに……？」と記されている。

○堤くんとさくら図書館

青樹小五年生の堤達輝は、「さくら図書館とのつきあいは、もう十年以上」「ぼくはここに赤ちゃんの時から通ってて、『堤くんは、この図書館の主だもんね。読書量も半端ないし、どこに何があるかも、よく知ってる。人に本をすすめるのもうまいよね』」と、今年の四月からこの図書館で働いている篠田要太さんに、いわれている (p.7)。

「ここは、ぼくの家からなんとゼロ分」(p.7)「この図書館は、ぼくの家の前を渡ったところであって、ぼくが初めてここにやってきたのは、ゼロ歳のときだ。今では、図書館の休館日以外は、毎日ここで本を読む」(p.12)という。

アリスクラブは、「二年ちょっと前に、さくら図書館に転勤してきた、山崎さんが、去年の四月にはじめた」「小学校の高学年だけ」の会員制クラブで、活動は月に一度、第二土曜の十時から十二時まで、ブックトークや地域のボランティアの人が、ストーリーテリングをしてくれることもある。最後の十五分間は、メンバーが本の紹介をする (pp.8-9)。

「さくら図書館は、市内にある五つの図書館の中では、小さいほうだ。でも、ここは子ども本が充実していて、中央図書館より多い。なので、ぼくにとっては最高の図書館だ」。

「青樹小の子たちのほとんどは、中央図書館を利用している。学校からの距離は、さくら図書館も中央図書館もそれほど変わらないかもしれない。だけど、中央図書館は最寄り駅の近くにある。駅の周辺にある塾に通っている子も多いし、買い物ついでに寄れるから、中央図書館の方が便利なのだ」3) (p.17)。「さくら図書館は、児童書は中央図書館より多くて、たしか、十万冊ぐらいあるはず」(p.112)という。

○同級生の皆川彩友と彼女が探している本

達輝は青樹小の同級生の皆川彩友から『探してる本があるの』といわれる。この図書館

にあるかどうかわからないし、書名や作者もわからない。『小さいころに、途中まで読んでもらった本』は、女の子が主人公で、名前はわからないが、親がいなかった。外国の物語だという (pp.23-25)。

達輝は、「父さんのタブレット PC を借りて、検索し」(p.26) たり、「図書館サイトから、本の検索ページにアクセス」し、「NDC 9 0 0 番台、つまり「文学」という分類の子どもの本、という条件で検索してみる」(p.27) がすぐにはみつからない。ストーリーの後半で、この本は『秘密の花園』3) であることがわかる (pp.167-168)。

○図書館の企画一夢の本棚

夏休みになると、<夢の本棚>という、職員の「山崎さん、篠田さんが考えた夏休みの特別企画がはじまる」。「この紙にあなたの夢を書いたら」「箱に入れてね。箱は、児童室のどこかにあります。次の日には、「夢の本棚」に、あなたの夢の本が並びます」(pp.33-36) という。夢といっても、『将来の夢でもいいけど、夜寝ている時に見た夢でもいいの』(p.37) と山崎さんはいつている。

「空をとぶ」というテーマでは、「飛行機や宇宙飛行士の本、客室乗務員の仕事を紹介する本」「紙ヒコーキの作り方」「アラビアンナイトを元にした空を飛ぶシーンのある絵本や、アニメになった物語の原作本」(p.42) など、「南アメリカ」では「南アメリカの国々を紹介する本や、ブラジルやアルゼンチンの作家の絵本」(p.43) が展示される。そのあとも、「アイドル」「こわい」「会社員」「ごちそう」について、それぞれの夢に関係がありそうな本が、「かけがえのない本に出会うこと」というテーマの時には、『はてしない物語』『星の王子さま』『もしぼくが本だったら』『ルリユールおじさん』(p.91) が並べられていた。達輝は「今のぼくには、かけがえのない、といえるだけの本があるわけではない。そんな本がほしいと思っていたわけではないのに、なんだかちょっとさびしい気がした」(p.95)。また、「自分らしさを大切にする」というテーマでは、『ミナの世界』『あしたのあたしはあたらしいあたし』『ぼくを探しに』が並んでいた (p.125)。

○同級生の永井玲央との交流

「同級生の永井玲央」は「運動神経が抜群で、特にサッカーがうまい」。「勉強は熱心ではないみたい」(p.47) だが、達輝は、さくら図書館でみかける。本は読んでいなかったが、職員の山崎さんは『休みに来たのかもね。それならそれでいいんじゃない?』。「やっぱり図書館に来る以上は、本を読んでほしい。不満そうな気持が顔に出たのか、山崎さんはくすっと笑った。『わたしは、ふだん図書館に来ない子が来てくれた、それだけでうれしいの』」本については、『身近な子が、それとなく本をすすめるのがいちばんいいのかもしれないわね』(pp.51-52) といわれ、達輝は玲央に話しかける。玲央が図書館きていた理由について『なんでこんな遠い図書館に来てるの?』『それは……図書館、すずしいから』ぼくはムツとした。『何、それ。すずみに来てたってわけ?』(p.118) というやりとりがあったあと、達輝は、職員の山崎さんに『図書館ってさあ、本、借りるとこだよ。あと、本を読むっていうか』という。『そうね。でも、それだけじゃないでしょ』ほかには、講演会やお話

会、アリスクラブみたいな活動、勉強したりパソコンで調べ物したり、『わたしは、玲央くんが毎日のように図書館に来てくれて、うれしかったよ。ずずしいからって理由でも。どんな理由で来てでもいいの。たとえば、学校にどうしても行けないから、図書館に行く。それもアリだと思ふの』と山崎さんはいった。『そういう子、いるの?』『たとえば、の話よ。でも、その子が図書館にいて、楽しいと思ったり、心が落ちついたりするなら、それでもいいでしょ。わたしは、図書館に来る人が、本に興味がなくてもいいと思ってる。それでも、ここにたくさんの本があることが、とても大事なんじゃないかな』。『だって、休みに来たってずずみに来たって、だれも困ってないもの』。そして、玲央くん、今は、ずずしいからだけじゃない、貸し出しカードを作ったのは、図書館の職員としてはうれしいことだと、達輝は山崎さんにいわれる (pp.121-124)。

また、玲央の家を教えてもらった、青樹小二年の「杉本桃香」について、図書館で見かけたとき「引っ込み思案というか、どこかおどおどしたところがある」と感じ、玲央に「保健室で」三回くらい会った、といていたことから、達輝は、桃香が「学校には行かないで、図書館に行っていたのではないだろうか。そして、学校に行く時は、教室に行かずに、保健室に登校しているのかもしれない」(pp.143-144)と考えた。

図書館に来る理由について、達輝は、本を借りることや本を読むことに限定したことを考えていたが、職員の山崎さんは、本とは直接関係なくても、多様な利用のされ方をすることにも、理解を示している。

○堤くんと図書館の決まり

同級生の皆川彩友が、さくら図書館で本を借りようとしたとき、中央図書館のカードは前に作ったが、家に置いてきた、という。達輝は、電話番号で調べられることを伝え、『図書館のことなら、なんでも知ってるんだね』(p.54)といわれる。

「玲央が、ゲートを出ようとした時、ピーッと音が鳴った」(p.57)。本を持って出ようとしたが、手続きをしていなかったのも、貸し出しカードを作るようすすめる。申込書に記入し、住所を証明するものがあるかときかれ『小学生はいらないんだよ。中学生以上が作る時は必要だけだね』と達輝はこたえる。(pp.61-62)

玲央に図書館の使い方を『図書館が休みの日とか、閉まってる時間も本を返すことができるんだよ』『建物の入り口のわきに、返却ポストがあるから、そこに入れればいいんだ』『ぼくたちにはあんまり関係ないかもしれないけれど、働いている人とか、出勤の途中や帰り道でも返すことができるんだ』(p.87)のように説明している。

また、自動貸出機について、彩友が『カウンターでも借りられるのに、やっぱり人手が足りないのかなあ』というも、達輝は、『それもあるかもしれないけれど、自分が何を借りているか、だれにも知られたくない人だっているから』(p.88)といっている。

プライバシーについては、青樹小二年の杉本桃香について、職員の山崎さんが『本が大好きで、連休のあとから来るようになったの。おばあさんの家が近くにあるらしいわ。でもこのことは、個人情報だから、ないしょ』山崎さんは小さく笑って、人さし指をくちびるに

当てた」(p.44)という場面がある。

プライバシーと図書館の貸出方式について、『山崎さんが子どものころは、バーコードとかなかったから、本の裏見返しのところにカードが入った紙のポケットがついていたんだって。借りる時にはカードに名前を書いて係の人に渡して、本を返すとカードがポケットにもどる。だからカードを見れば、それまでだれが借りたかわかったらしい』(p.89)と、達輝が彩友に、いっている場面があり、そのページの下部には、本の裏見返しの部分が描かれ、ブックカードがポケットに入っているページと、そのとなりに返却日票が張り付けてあるページのイラストが書かれている。

図書館の開館については、『図書館はお盆でも開いてる』(p.99)としてその日の状況が紹介される。次節でふれる講演会の講師の著作について、人気のある本で予約も多いと彩友に話して、資料の予約については、『カウンターで申し込むこともできるし、家のパソコンからでも、予約はできる』(p.103)と案内している。

○図書館の実情

「夏休み初日」「九時開館」の「開館時間に合わせてやってくるのは」「図書館の座席を確保して勉強をする人や、パソコンを使うために来る人もいる」(p.31)、「新聞コーナーは、児童室と同じく一階にあって、そこには、丸テーブルがいくつか置いてある。新聞を読んでいるのは、年配の男の人が多い」(p.46)、「図書館の本には、よごれや傷みを防ぐために、透明なフィルムのカバーがかけられている」(p.131)など、達輝は、図書館の実情についてもよく知っている。

この図書館では、「中学生と高校生を対象に、夏休みに働く図書館ボランティアを募集」していて、「主な活動は貸し出し業務を担当したり、本の修理や棚の整理をしたり、夏休みのイベントを手伝ったり、ということ」。達輝は、中学生になったらやってね、と山崎さんにいわれている(pp.130-131)。

○湯浅じゅん講演会

夏休みの後半に、『ラン丸』シリーズの著者とされる「湯浅じゅん」の後援会が図書館で開催される。司会は、夏休み図書館ボランティアの中学生くらいの男子(p.130)がやっていた。講演では、はじめに『わたしは、図書館によって助けられたのかもしれない』とあって、街に本屋さんがなく、学校でもあまり友だちがいなくて、三月生まれで、体が小さかったこともあり『学校ではとても緊張していました。けれど、図書館に行くと、不思議とリラックスできたのです』。『でも、わたしは、図書館で、いつもいつも本を読んでいたわけでもないのです。本をひざにのせたまま、ぼーっと空想していたこともあります。そんな時も、だれもしなかったりしない。今思えば、わたしは図書館に守られていたような気持ちをしているのです』(pp.134-136)と、湯浅さんは講演のなかでいっていた。質問では、ある女の子が、「とっておきの一冊」についてたずねると、作家は、『マガーク探偵団』4)シリーズが好きで、「図書館で借りて読みました」(p.139)とこたえている。そのあとおこなわれた作家のサイン会で、達輝が、『この図書館、どうですか』と聞くと、作家は『庭がすて

き』、『夢の本棚、とか、おもしろいね』(p.141) などといていた。

注)

2)濱野京子・作 森川泉・絵 『夏休みに、ぼくが図書館で見つけたもの』あかね書房、2019
巻末に「濱野京子 熊本県に生まれ、東京に育つ。『フュージョン』(講談社)でJBBY賞を、『トーキョー・クロスロード』(ポプラ社)で坪田譲二文学賞を受賞」と記されている。

3)フランシス・ホジソン・バーネット『秘密の花園』

日本語翻訳は、複数のテキストが存在する。

下記の『もう一度読みたい少女小説の世界』では、『秘密の花園』について、「インドで両親がコレラで亡くなり唯一の身寄りを頼りにイギリスに来たインド育ちのメリイ。誰にも愛されたことがなくひねくっていたメリイは、この屋敷で初めて自然や人と触れ合い生命力を取り戻していく」(p.58)と「あらすじ」が紹介されている。

光元志佳、谷水輝久・編集、島崎晋・小沢宗子・須藤美樹子・執筆『もう一度読みたい少女小説の世界』双葉社、2018、pp.58-59

4)下記の論考では、このシリーズの『あやしい手紙』(pp.54-57、pp.128-134)において、「子どもにはやさしい対応をしているが、利用者のプライバシー保護の観点からは、問題があると思われる行動をとっている図書館員が、読者から見て、好意的に描かれている」ことを指摘している。

E・W・ヒルディック：作、露沢忠枝：訳、山口太一：画『あやしい手紙 マガーク少年探偵団7』あかね書房、1979

佐藤毅彦「現実の図書館状況を反映したストーリーで、図書館はどのように描かれたか『襲名犯』『図書室のギリギリス』のケースについて 図書館はどうみられてきたか15」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.51、2015.3、pp.1-10

3-3. 『貸出禁止の本をすくえ!』5)

翻訳作品の同書は、学校図書館を舞台としたものだが、先にとりあげた、日本で2019年に刊行された2作品と比較して検討する。

○図書館の職員

上記、日本のものは、学校図書館ではなく、公共図書館で、子どもを対象としたサービスとそれを利用している子どもの姿を、主として、子どもの視点から描いたストーリーであり、図書館の職員が複数登場する。『しずかな魔女』では、「緑色のエプロンを着けたまだ若いその人」と表現されている(pp.10-11)「深津さん」と、「灰色の髪に眼鏡をかけ」草子が<館長>とあだ名をつけた「図書館にひとりだけいる男の人」(p.14)である。『司書』という仕事があるのを、草子はここに通い出してはじめて知った」(p.12)とある。『夏休みに、ぼくが図書館で見つけたもの』では、「副館長の山崎美晴さん」と、「今年の四月からこの図書館で働いている篠田要太郎さん」(pp.5-7)である。いずれも公共図書館を舞台としたストー

リーだが、「司書」という言葉の印象は希薄である。

『貸出禁止の本をすくえ!』の作者、アラン・グラッツは「アメリカの作家」(巻末の奥付ページの記述)と記されており、同国を舞台にしていると思われるが、図書館の職員に関しては、日本とは制度の違いがある。この小説は、学校図書館を舞台としているが、そこにいる職員について、翻訳書では「司書」という表現が使われている。6)

○学校図書館の司書

主人公のエイミー・アンの通っている学校の学校図書館にいる「図書室の司書のジョーンズさん」(p.7)は「体の大きい女の人だ。髪は茶色で短く、ふちにきらきらした石のついためがねをチェーンでさげて、字を読むときだけ使ってる」(p.8)とある。

のちに、教育委員会の会議の場面で「ドクター・オパール・ジョーンズ」と紹介されると、『たぶん図書館学の博士号^{ドクター}を持ってんだろう』パパがおしえてくれる。エイミー・アンは、「図書館学なんて言うものがあるの?」「頭のなかに、白衣を着た図書館学の博士が出てきて、ドラマの犯罪捜査官みたいに、顕微鏡で本をしらべてる場面がうかんだ。」「図書館学の博士ってどんな人たちなんだろう」(pp.38-39)と考える。資格や養成制度・職員配置などが違っている日本の作品にはなかった「図書館学」「図書館学の博士号」という表現が使われ、学歴や専門性の違いが反映されている。

○貸出の管理方式

『夏休みに、ぼくが図書館で見つけたもの』では、友人の発言で「自動貸出機がある」が、「カウンターでも借りられる」ことが示された後、主人公の堤達輝が、副館長の山崎さんに教えてもらったこととして、「山崎さんが子どものころは、バーコードとかなかったから、本の裏見返しのところにカードが入った紙のポケットがついて」いて「借りる時にはカードに名前を書いて係の人に渡して、本を返すとカードがポケットにもどる」ので「カードを見れば、それまでだれが借りたかわかっただけ」(pp.88-89)ことが述べられている。そのページの下には、図書の裏見返しに、ポケットに入ったブックカードや、返却日票のイラストが描かれている。

『貸出禁止の本をすくえ!』では、学校の図書室はコンピュータを使ったシステムで管理されており、「ジョーンズさんが本の裏表紙のバーコードをレーザーのスキナーで読み取ると、コンピューターに、その子の借りる本の題名と返却期限が記録される」。「借りた本を機械にごつごつとこすりつけて、入り口のセンサーをとおりぬけても警報がならないように」するという方式をとっている (pp.128-129)。

むかしは、本の「裏表紙の内側に短い封筒がはりつけてあって、なかにカードが入っている」。「『本を貸すときこのカードをとりだして、返却期限のスタンプをおし、借りる人に名前を書いてもらうの』。「カードはいちばん上に本の題名と作者の名前が書かれていて、その下には欄がふたつあった。一方には返却期限をスタンプでおして、もう一方には借りた人の名前を書くようになってる」。「『カードは日付順に整理しておけば、毎日、どの本が返却期限をむかえるか、ひとめでわかるというしくみよ』。『貸出カードが入っていた封筒に、

返却期限のスタンプをおした紙をいれるの』(pp.129-130)という方式で管理していたことが、司書のジョーンズさんによって説明される。のちに、エイミー・アンは、自分たちのロッカー図書館に使おうとして、むかし、日付をおしていた古いゴムのベルト型のスタンプ(p.132)をゆずりうけている。

図書館の貸出管理については、『貸出禁止の本をすくえ!』で描かれている状況は、今回取り上げた日本の事例『夏休みに、ぼくが図書館で見つけたもの』と共通する要素がある。いずれもいまは、コンピュータを使用して処理しているが、むかしの方式として、ブックカード必要事項を記入させ、それを図書館に保存して、貸出記録を管理する方式がとられていたことが、職員によって語られている。

○職員の業務

『しずかな魔女』では、棚に本をもどす(p.11)作業をしている時に、草子に話しかけられ、カウンターで検索して確認し、他館から取りよせもできることを紹介する(pp.9-10)、勉強してはダメかと聞かれ空いていれば問題ないと柔軟に対応する(p.15)、草子がシルバーサークルの人に「フトウコウ」かと声をかけられて困っているとき、草子を新着コーナーに案内し、さらに涙がこみあげてきた草子を、職員用の階段につれていく(pp.17-22)、「しずかな子は、魔女に向いてる」というメッセージについて、レファレンスを受けると、みずから小説を書いて、草子に手渡してくれるよう他の職員に依頼する(pp.32-33)、などが図書館職員の業務として描かれている。

『夏休みに、ぼくが図書館で見つけたもの』では、児童対象の会員制クラブを立ち上げて運用する、夏休み企画「夢の本棚」を発案し運営する、講演会を企画し実施する、中高生ボランティアを募集し活用する、図書館の利用目的に関して柔軟に反応する(一主人公の同級生の永井玲央がすずみにきてくれるだけでもうれしいと発言している)、などのように職員の対応が描かれている。

『貸出禁止の本をすくえ!』では、学校図書館で提供している資料に関するクレームと教育委員会での議論がメインになっており、図書館内でのさまざまな業務に対応している場面もあるが、ストーリーに登場する「学校図書館の司書」であるジョーンズさんの発言内容は、教育委員会での貸出禁止措置に反対することに関してのものが大きな割合を占めている。

一方、ジョーンズさんが一時的に契約を解除されて、そのあとに学校図書館にやってきた人物については、ごく限られた場面ではしか登場しないが、図書館でさわぐ子どもを注意するシーンがある。「芸能人のスキャンダルがのってる雑誌を読んでいた」(p.248)、「おしゃべりしない」とどなる(p.249)、「おしゃべりは禁止ですよ」と大声で注意した(p.257)、など、前任のジョーンズさんとは対照的に、子どもがあまり魅力を感じられない描かれ方になっている。

○資料選択に対する対応

日本の作品では、資料の選択について、直接的な言及はないが、『しずかな魔女』では、草子の読んでいるシリーズ本の貸出状況を検索したり、関連書を案内する対応をしている。

『夏休みに、ぼくが図書館で見つけたもの』では、小学校高学年に限定した会員制のアリスクラブでの本の紹介や、夏休み企画「夢の本棚」のテーマ展示、など、子どもの利用者に配慮した資料の案内を実施していることがうかがえる。

『貸出禁止の本をすくえ!』では、冒頭で、主人公のエイミー・アンが、「ある日、わたしの大好きな本が学校の図書室から消えたのが、このお話のはじまりだった」(p.4) とするところから、始まっているように、学校図書館での資料の選択が、ストーリーのメインテーマになっている。

学校図書館での本の選択について、教育委員会の会議で協議する場面では、司書のジョーンズさんの一連の発言で、資料選択に対する原則的な考えが示されている。

『今回の貸出禁止措置は、この委員会自体がさだめた、図書に対する異議申し立ての続きを無視し、申請書の提出すらないまま決められたものです。しかしより大きな問題となるのは、それが知的自由をおびやかすということでしょう』委員の何人かがうんざりしたように眼玉をぐるっとまわして、いすの上でもぞもぞ体を動かした」(p.39) とあるように、「知的自由をおびやかす」として原則を主張する専門職員の見解に対して、地域住民の代表委員が「うんざりした」ような態度をとっている姿も描かれている。

一方で、学校に通っている子どもの保護者の一人である、スペンサーさんは、『委員のみなさん、わたしはこの町の出身です。かつてはシェルボーン小学校の児童でした』。『その当時、学校の図書室は安全な場所でした』。『学校は、親の権威を傷つけるような場所であってはならないと思います。親のいうことをよくきく子を育てる場所ではなくてはなりません』(p.41)。「『ジョーンズさんは「検閲」という言葉こそ使いませんでした、お話の内容からすると、今回の貸出禁止措置が、検閲、すなわち権力者にとってつごうの悪い表現をとりしめる行為に当たるとお考えのようです。わたしは、「検閲」には反対です。ですが、「常識」は大切にしたいと思っています。子どもたちはまもってやらねばならないのです。年齢にふさわしくない本を遠ざけることは、検閲ではありません。常識です』。『今回、貸出禁止にした本は、わずか十一冊です。図書室にはまだ何千冊という本がありますから、子どもたちはそれを存分に楽しむことができます。しかも、それらは禁止したものよりはるかにいい本です。今回、わたしが図書室の棚からはずすようにおねがしたのは、子どもにふさわしくない本や、欠点をおぎなうだけの取り柄がない本ばかりです』(pp.42-43) といっ、て、「検閲」ではなく「常識」の範囲で、ごく一部の本を貸出禁止にただけ、と主張する。

主人公のエイミー・アンは、この会議に出席して、「貸出禁止にはいけない理由」を話すはずだったが、「わたしが意見をいうつもりだったんだから。いいなかったんだから。いえなかったけど……」(p.44) とあるように、結局、発言できずに終わり、教育委員会で貸出禁止が可決されてしまう。

○貸出禁止の本がふえる

さらに、ある日スペンサーさんが、「本の題名をずらずら書いた」リストを持って、学校の図書室にやってきた。司書のジョーンズさんは『そうやって題名を書きだした本、ぜん

ぶ読まれたんですか?』といったが、スペンサーさんは『読む必要なんかありません』。

『先日、教育委員会で図書室の本についての不安を訴えたところ、多くの保護者が、問題のある本のタイトルをおしえてくれました。わたしは、そういう本のあらすじや評価をネットでしらべて、小学校の図書室にはふさわしくないと、結論を出したのです』。『あなたが結論を出したんですか』ジョーンズさんがいいかえす。『図書館情報学の学位をお持ちだとは、存じませんでした』(pp.85-86)。スペンサーさんは、異議申し立て申請書に記入して、といわれても、『そんなものは必要ありません。ここにリストアップした本については、すでに教育委員会のみなさまにご意見をうかがって、シェルボーン小学校図書室にふさわしくないと結論が出ております』(p.87)といて、この学校に通っている自分の子どものカードで「リストの本をぜんぶ自分で借りて、ほかの人が借りられないようにする」(p.87)という行動に出る。

そして、「つぎの月にまた教育委員会の会議があ」り「今回もジョーンズさんが、図書室で貸出禁止になっている本を棚にもどすべきだと意見をいったけど、委員会の人たちはスペンサーさんの意見に賛成したらしい。だからスペンサーさんがつくったふたつめのリストの本が、ぜんぶ正式に貸出禁止になった」(p.100)。

○ロッカー図書館

エイミー・アンは、自分が発言できなかった教育委員会の帰り、本屋によって貸出禁止になった本の一冊である『クローディアの秘密』を買ってもらう (p.49)。友人からその本を貸してほしいといわれたことがきっかけで、ロッカーに貸出禁止の本を集め、それを読みたい人に貸し出すことを始める (p.54)。

おこずかいで買った本や、同級生などに家にあった本をもってきてもらったりして、貸出禁止になった本をロッカーに集め、エイミー・アンは「まるでわたしたちだけの小さな読書クラブみたい」(pp.73-74)と感じる。「スペンサーさんが貸出禁止にしたうち半分近くの本がわたしのロッカーに揃うことになる。わたしだけじゃなくて、だれでも読みたい人に貸してあげられる」(pp.82-83)。「ロッカーの棚に置いてあったものをぜんぶどけて、かわりに本を置いた」。「スペンサーさんと教育委員会が貸出禁止にした本を集めて、読みたい人がだれでも借りられるようにするんだ。こうして貸出禁止本のロッカー図書館がはじまった」(p.84)。

「まだ持っていない本がたくさんある」が、「もう本を貸してくれそうな知り合いがいなくなったみたいだから、お金を集めて本を買うしかない」と考えたエイミー・アンは手作りお菓子の即売会でお金を集めたりもした (pp.97-98)。

○校長室に呼ばれる

エイミー・アンは、校長室によばれ、ロッカーのとびらにはってあった『シェルボーン小学校図書室貸出禁止リスト』という紙についてきかれる。校長先生に、『禁止』ではなく『あれらの本は、禁じられたわけではありません。図書室の棚からはずして、かたづけただけです』といわれ、エイミー・アンは『どこがちがうんですか?』ときいて「しまう。校長先

生は『禁止』は恣意的におこなわれるということで、ちゃんとした理由もなく「『だれかひとりの思いつきでおこなうということ。図書室の本は、ひとりの思いつきで恣意的に禁じられたわけではありません。複数の人が、いえ、教育委員会全体が、不適切と判断したから、棚からはずしたんです』。エイミー・アンは「『スペンサーさんが気に入らない本が一冊あったから、教育委員会の人たちに話をして、それを貸出禁止にさせたんでしょう?』」と聞いたかったが、なにもいわなかった。「校長先生と議論するのはむずかしい」。「わたしには『貸出禁止』と『棚からはずす』のちがいがわからなかった。どっちにしても、わたしたちはその本を読めないんだから」(pp.118-119)と感じていた。

○図書館での講演会

そうした中で、学校では、PTA が集めた資金で講演会が行われる。講師はデイブ・ピルキーさんで、『スーパーヒーロー・パンツマン』7)シリーズの作者 (p.152) だった。

講演のあと質問で、エイミー・アンは「『うちの学校の図書室では、ピルキーさんの本が貸出禁止になってしまったんですけど、そのことについてどう思いますか?』」とたずねると、作家は「『できることならぼくの本も棚に置いてもらって、だれでも読めるようになるといいね。図書館には、いろいろな本を置くことが大切だとぼくは思う。名作も、くだらない本も、まじめな本も、ゆかいな本も。だれもが、読みたいときに読みたいものを自由に読めるようじゃいけないし、その本がなぜ好きかとか、どういう価値があるかなんていうことを、いちいち説明しなくてもいいようであってほしい。いつか、きみたちみんなが、ぼくの本を読める日が来るようねがっているよ』」(pp.173-174) といった。校長先生は「腕を組んでこわい顔をしている。でもピルキーさんや、わたしのことをにらんでるわけじゃない。先生がにらみつけていたのは、ジョーンズさんだった」。「『勇敢だったわね』ジョーンズさんがわたしにいった」(p.175)。「『ピルキーさんが、あなたのこと、とても感心していたわよ』」。「『あなたにプレゼントをくださったの』」とジョーンズさんは『スーパーヒーロー・パンツマン』のシリーズを、作家からのプレゼントだといって、エイミー・アンにわたした (pp.181-182)。

○図書室からぬきとられてしまった本をロッカー図書館へ

学校の図書室からぬきとられて事務室の本棚にしまっている本を「『図書室の本なんだから。もともとぼくらに貸し出すためのものでしょ? それをしばらく借りるだけ』」(p.185) と子どもたちは考えて、その本をロッカー図書館におくことを考える。貸出手続きをしないで本を持ち出すと、ゲートのところで警報が鳴るので、わざと鳴るようにしてジョーンズさんの注意を引いている間に、事務室の棚にある貸出禁止の本でロッカー図書館にないものをぬきだして、カウンターで磁気を消す装置にあて、本をもちだす (pp.192-194)。

図書室から持ち出した本の「古い貸出カードはおもしろかった。いちばん上にタイプライターの活字で、本の題名と作者の名前が打ってある」「その下の欄に、借りた人の手書きの名前と、返却日の赤いスタンプ」がおしてあった。「わたしが一九八五年にシェルボーン小学校にかよってたら、その子と友だちになっていたかもしれない」。「本をもう一冊手にとっ

て貸出カードをぬき、知っている名前がないか、ざっとしらべた。あった！すごくよく知っている名前が。「このカードは、だいじにとっておかなくちゃ」とエイミー・アンは考えた (pp.199-200)。

○ロッカー図書館の本を貸したことで出席停止になる

エイミー・アンは、学校の図書室で貸出禁止になりロッカー図書館においていた本を、同級生に貸したことを学校に知られ、校長先生は、ロッカーの錠前をカッターでこわして、中から貸出禁止の本をとりだした (p.216)。両親が学校によびだされ、校長先生は、ロッカー図書館にあった本の『一部は、シェルボーン小学校図書室の蔵書です』と書いて、勝手に本を持ち出したことで、エイミー・アンは、三日間の出席停止処分となる (pp.219-221)。

このことが、夜のテレビ番組でとりあげられ、インタビューされたスペンサーさんは『小学校四年生の子どもは、まだおさないのですから、読んでもいい本といけない本を自分で適切に判断することはできません。そのために保護者がいるのですし、そのために教育委員会があるのです。そして教育委員会は、これらの図書が小学生には不適切であると——それどころか、多くの場合、有害であると判断しました。ですから今回の貸出禁止措置は、子どもたちをまもるために、おこなわれたことなのです』といい、ジョーンズさんは『保護者には、自分の子どもが読んでもいい本と、読んではいけない本を、決める権利があります。しかし、ほかのすべての子どもが、読むべきでない本を、勝手に決めてはいけません』と、教育委員会の会議と、おなじことをいっていた。ジョーンズさんは、教育委員会の命令にそむくことになり、契約を解除される (pp. 231-233)。

○教育委員会の会議

『貸出禁止が、ばかばかしいってことをわからせるには、とことんまでやってみせるのがいちばんいいと思うんだ。一冊にケチをつけて貸出禁止にしたら、そのうちぜんぶ禁止することになる』 (p.253) とスペンサーさんの子どものマービンがいて、子どもたちみんな、あらゆる本についての異議申し立て申請書を書くことになる。

そのあと教育委員会の会議で、いちばんはじめに、エイミー・アンは、もっと異議申し立てをしたい本があると、申請書の山をとりだす。それは、「二千五百四十一枚」あり、これらを貸出禁止にしてください、と申し出る (pp.301-302)。『議長にとっては、くだらないかもしれませんが。どんな理由だって、本人以外にとってはくだらないものです。すでに棚からはずされてしまった本も、くだらない理由ではずされたと思っています。その時の理由よりも、こちらに理由のほうがくだらないって、どうしていえるんですか?』という、会議室じゅうが、しずまりかえった。『あちらの異議申し立てはきくけど、こちらは無視する、なんていうことはできません。これまでも、たったひとりが問題を感じたっていう理由で本を棚からはずしてきたんですから、わたしたちが申請書を書いた本もぜんぶ貸出禁止にしないとおかしいです。だって、これらの本にも、問題を感じるという人がひとりずついるんですから。そうやってどれもこれも棚からはずしていったら、シェルボーン小学校の図書室には、本が一冊もなくなります』とエイミー・アンはいった (pp.306-308)。

スペンサーさんは、『わたしたちが貸出禁止にしたのには、ちゃんとした理由があります。有害図書という理由が。どの本も、さまざまな、悪しき行動をうながす内容でした』という、エイミー・アンは『つまり、教育委員会のみなさんが棚からはずした本をわたしが読んだら、大人になったとき、悪い人になるっていうことですよ？』といて、さいしょに貸出禁止になった本の一冊で、「女の子がティーンエイジャーになるときの、体の変化について書かれている『神さま、わたしマーガレットです』について、スペンサーさんは読んでいないといていたが、貸出カードに、一九八二年のスペンサーさんのサインがあることを明かす。「わたしが古い本をめくって見つけた貸出カードを高くあげて見せると、会議室じゅうの人たちが、はっと息をのんで、それからくすくす笑った。スペンサーさんの顔から、血の気がひいた」。スペンサーさんは、一度くらい借りたかもしれないが、読まずに返した、といったが、『五回もですか？』わたしがきくと、みんながどっと笑った」。エイミー・アンは『スペンサーさんは大人になって、とてもいい人になったし、いいお母さんで、りっぱな市民だと思います。ご自分で有害図書だとおっしゃる本を五年生のとき五回も読んだのに。本は、人にすばらしい影響をたくさんおよぼすけれど、たぶん、人を悪人にしたりは、できないんだと思います』といい、スペンサーさんはすわって、ティッシュでなみだをふいた」(pp.310-312)。

ジョーンズさんは、シェルボーン小学校の司書をごく最近までしていたといったあと、図書に対する異議申し立てには、正式な手順があつて、先生方の図書委員会で検討し、司書が最終決定していた。それは教育委員会がつくりあげたしくみだったが、『今回、シェルボーン小学校の図書室で貸出禁止になった本は、どれもこの手順を経ていません。一冊たりともです』。『今回の騒動の元凶は、教育委員会が正式な異議申し立ての手続きを無視して、恣意的に本を貸出禁止にしたことにあります』といて、正式な手順によることを提案し、棚からはずされた本はもとにもどして、『先生方の図書委員による検討と、さらには学校司書による最終決定を待つこととなります』。『子どもにむかって、この本は読んでもいいけどこの本はいけないという権利があるのは、その子の保護者だけです』と、これまでの経過とその後の措置について説明し、原則を主張した。その後、「ジョーンズさんは、シェルボーン小学校の司書に復帰し、棚からはずされた本はぜんぶ、もとにもどされて、ずっと置いておけることになった」(pp.314-317)。

注)

5)アラン・グラッツ著、ないとうふみこ訳『貸出禁止の本をすくえ！』ほるぷ出版、2019

著者、アラン・グラッツについては、巻末で、「アメリカの作家。第二次世界大戦などの歴史を題材にした YA、スポーツを題材にした児童書、小中学生向けの SF など数々の作品を書いている。現代の小学校を舞台にした児童書は本書が初めてで、初の邦訳作品となる」と記されている。

巻末の「訳者あとがき」では、「このお話で貸出禁止にされる」のは「どれも実在の本で」

『過去三十年間にアメリカの図書館で、少なくとも一度は、じっさいに異議申し立てや貸出禁止措置を受けたことのある本』だというので驚きました」(p.330)と述べられている。

なお、同書については、2019年全国図書館大会三重大会・「第9分科会 図書館の自由」図書館利用のプライバシー保護、において、基調報告(西河内靖泰)「図書館の自由・この1年」のなかで、紹介された。

「第105回全国図書館大会三重大会図書館の自由分科会報告」『図書館の自由』vol.107、2020.2、p3、では、基調報告に関する質疑応答で、『貸出禁止の本をすくえ!』に関する質問があったことが、記録されている。

6)下記の原著作では、「Mrs.Jones,the librarian」(表紙カバー)、「our librarian,Mrs.Jones」(p.11)と記されている。

Alan Gratz『Ban This Book』Tom Doherty Associates、2017

7)『夏休みに、ぼくが図書館で見つけたもの』で講演した「湯浅じゅん」は、架空の人物と思われる(著者名で検索しても、児童文学の著書は表示されない)が、この著者・著作は実在し、徳間書店から、下記の翻訳が出版されている。

デイブ・ピルキー、木坂涼・訳『スーパーヒーロー・パンツマン 1～5』徳間書店

4. おわりに

図書館とプライバシーの関係については、2019年に刊行されたコミックの作品でも問題が指摘されているケースがある。1)日本図書館協会図書館の自由委員会ニュースレター『図書館の自由』では、学校図書館問題研究会が、利用者のプライバシーにかかわる描写について、出版社に文書を送ったことが紹介されている。2)また、実際の図書館運営において、たとえば、苫小牧市の図書館で、警察からの照会に応じて、利用者の情報を提供した件について、報じられた。3)

一方、社会全体のなかで、プライバシーについては、電子書籍の普及によって「アマゾンのECで本を買えばその購買データがアマゾンに残り」「アマゾン・キンドルで電子書籍を購入すれば『実際にその本を読んだかどうか』『どこを読んだか』『どこにマーカーを引いたか』といったデータも収集可能」で、「アマゾンではオンライン経験とオフライン経験を継ぎ目なく消費者に提供しながら、同時にビッグデータを収集し、それらをAIで解析し、カスタマーエクスペリエンス向上につなげている」(p.68)という状況になっていることが、示されている。4)

さらに、人間の行動全般について、「人は『買い物』をしなくなる」ことをタイトルにした著作のなかで、「なくなるのは、これまでの買い物におけるプロセスだ。店に行くことや、現金を用意すること、商品の現物を見ること、さらには商品を自分で選ぶことも含まれる」(表紙裏カバー)。「AIが勝手に必要なものを調達してくれるので、自分で必要なものを『探す』必要がない」(p.182)とする一方、デメリットとしては「個人情報が増えるリスク」があり「それらは便利さと引き換えのもの」である。「これから最先端のサービス

を受けるには、その人の買い物履歴や移動履歴、健康状態など、すべてのプライベートな情報をサービス提供者に送り続けなければならない。また、街なかにもあらゆる場所に監視カメラやセンサーが設置され、通行人の行動は逐一記録されるようになるだろう。「こうした個人情報、いつか市場に出回ってしまわないかと警戒感を持つ人もいる。もちろんそのリスクはゼロではない。しかし、どんなに拒絶したくても、私たちはそのリスクを受け入れることになるだろう。それだけ革新的なサービスが次々に登場するからだ」(p.183) という見解が発表されている。5)

人びとの生活全体について、さまざまな変化が生じていく状況で、図書館におけるプライバシーの問題も、利用履歴の活用などに関して、これまでとは異なった新たな局面をむかえる可能性もある。利便性とそこから生じるリスクをどのように考えてサービスを展開していくのか、また、そうしたことが、フィクションの中でどのように描かれ、どのように受けとめられていくのか、今後の動向に注視したい。

今回とりあげた日本の作品では、公共図書館の児童に対するサービスを描いていながら、「司書」ということばの存在感は、希薄なものだった。すべてのフィクションにそうした傾向がみられるわけではないが、たとえば、小学生の読者を想定した際に、現在の日本の図書館の雇用状況の全体像をわかりやすく紹介することが困難になっていると、創作者のがわが考えている可能性もある。「司書」資格、「司書」職としての雇用、有期契約、雇い止め、など、雇用されるがわが安定した職業と感じられない実態が存在するなかで、それが児童向けのフィクションにどのように描かれるのか。

一方、圖書の貸出や資料提供に加えて、たとえば、CCCの図書館が、多くの入館者を集めて、メディアで注目されたように、図書館の居場所としての機能を紹介している文献もある。『人口減少社会のデザイン』では、「居場所」とまちづくりについて扱うなかで、日本経済新聞社・産業地域研究所が行ったアンケートを紹介し、「首都圏に住む60歳から74歳の男女1236人」に、退職後の居場所について、「あなたは自宅以外で定期的に行く居場所がありますか」という質問をしたところ「男女ともに1位が図書館で、これはやや意外にも思うと同時に、少し考えるとなるほどと思えるような結果かもしれない」。「現在の日本の都市では、『居場所』と言えるような場所が概して非常に少ないということが示されているのである」(p.101)としている。6)

一般には、多くの来館者が訪れていることが報道されているCCC運営の図書館について、たとえば、周南市の徳山駅前が開館した、「周南市立徳山駅前図書館」について、裁判の傍聴記録などの著作を発表しているルポライターによって、「スターバックスやおしゃれなカフェができています」。「周南市は徳山駅ビルを『周南市立徳山駅前図書館』として昨年二月にオープンさせていた」。「都会的に生まれ変わった駅ビルだが、周辺の商店街に変化はない。表通りの飲食店は、居酒屋を除き、ほぼ閉まっていた。アーケード街は薄暗い。ガラス張りの真新しい図書館から漏れる照明が、駅前に華やかさをもたらしてはいたが、従来の町並みのコントラストが激しく、場違いで唐突な印象を受ける。数える程しかない図書館の訪

問者を外から眺めながら、コンビニで軽食を買い、ホテルに戻った」(pp.172-173)と述べられている。そして、市民の見解としても「午前中に、役所や図書館を回る。移動の際に流しのタクシーに乗り、最近の周南市について尋ねる」。市長選挙で「前市長は敗れ、初の女性市長が誕生した。話をするだれもが、前市長の不満を口にした」。『徳山には駅から少し離れたところに中央図書館があるのに、駅前にも図書館ができちゃったでしょう。なんであんな近くにもうひとつ図書館があるんじゃ。買い物やら飲食ができる場所になればよかったですけどねえ。行ってみました？人が全然おらんでしょう』(p.213)という声を取りあげている。

実際に「郷土史を探しがてら、駅前に新しくできた『徳山駅前図書館』に入ってみた。神社について記した文献があればと思ったのだ。だが、書架には残念ながら、方言にまつわる書籍などが数冊あるのみ。館内の椅子に腰掛け、パラパラとそれをめくり、すぐに戻した。館内では、机を借りて勉強している学生が数人いる。入館者も多くないので勉強には最適だろう。自分がこの地に住む学生であれば、ありがたい場所だったのかもしれない」(p.243)と感想を述べている。7)

また、今回は、児童を対象とした作品を取り上げたが、大半の図書館で、児童サービスの一環として実施されていると思われる、小学生対象の「読み聞かせ」について、その意義について、疑問視する見解も発表されている。『不道徳お母さん講座 私たちはなぜ母性と自己犠牲に感動するのか』には、「現在の学校では」「ゲーム性を絡めた課外読書推進イベントが盛んにおこなわれている」。「こうした風潮の中で『読み聞かせ』の教育効果も大きくクローズアップされている。小学校のクラスでPTAや地域ボランティアが読み聞かせを行うのは、今やありふれた光景である」(p.20)ものの、「読み聞かせを小学生が本当に欲しているかは疑問に思うところがある」。「幼い次女を連れて近所の図書館を訪れたとき」絵本コーナーで、読み聞かせボランティアが、参加を呼び掛けていたが、子どもたちはリアクションが少なく、「『幼児ではあるまいし、読み聞かせなんてプライドが傷つくし勘弁』というのが子供たちの本音なのだろう。小学生相手の読み聞かせ活動の定着は、子供が欲しているからというよりも、大人の思惑によるものとみえる」。「子供に本を読ませたいなら、全学校に常勤の司書を配置して子供がいつでも図書室に入れるようにし、蔵書を充実させるのが一番だ」が、学校司書の配置は限定的で「教育への公的支出の割合がOECD加盟国の中でも最低レベルの日本では、とても図書室までお金が回らない、というのが実情のようだ」(pp.21-22)と、この著者は述べている。8)

とはいうものの、現在でも、図書館は社会のなかで、一定の存在感を有している。たとえば、若年層に圧倒的人気があり、2017・2018年に『日本レコード大賞』を連続受賞したアイドルグループ『乃木坂46』の24th『夜明けまで強がらなくてもいい』(2019.9.4リリース)のカップリング曲『図書室の君へ』は、タイトルに「図書室」が使われ、歌詞の中でも図書室のなかでの状況が扱われている。9)

また、関連グループの『欅坂46』のメンバーである「原田葵」が出演した『くりいむク

イズ ミラクル 9』(2020年2月5日放送)では、「様々な人が訪れる場所です」などのヒントから「図書館」を回答させる問題が出題された。10)

さらに、派生グループである『日向坂46』がレギュラー出演する番組『日向坂で会いましょう』では、MCの好みに合わせたコスプレをする回(2019年12月2日(12月1日深夜)放送)で、メンバーの「宮田愛萌」は「図書館の司書さん」という紹介のテロップとともに、画面に登場した。11)

「1. はじめに」でとりあげた『ルパンの娘』の原作には「『そうか。華ちゃんは図書館に勤めているのか。道理でしっかりしているというか、品があるというか』」(p.11)「華と出会ったのは一年半ほど前だ」。「地味で、おとなしい女の子。それが華に対する最初のイメージだった」。「一年ほど前から付き合うようになり、大人しい感じに見えて、それでいて一本筋が通っているというか、見た目以上に強い女性であることを知った。今どきの女性には珍しく、古風で一本気な性格だった」(pp.19-20)といった表現がみられる。

こうした例からは、時代がうつりかわるなかでも、どこか変わらない図書館や図書館員のイメージがうかんでくる。インターネットの普及や地方行財政の変質など、さまざまな状況の変化に対応して、図書館の実態は大きく変わりつつある。そうした状況がフィクションの中でどのように描かれていくのか。今後も検討の対象としていきたい。

注)

1)成田美名子『花よりも花のごとく18』白泉社、2018

ひかわきょうこ『魔法にかかった新学期2』白泉社、2018

2)『花よりも花のごとく』18巻132pには、小学生時代の回顧シーンにおいて、主人公がカウンターの職員から同級生の名前が記入されている貸出カードを見せてもらう、という場面があります。回想は17年前なので、当時の状況を考えればカードによる貸出方式が採用されていた学校もあったとおもいます。けれども、職員が利用者の情報を本人に許可をとらずに第三者に教えることには問題があると考えております」

『魔法にかかった新学期』2巻40-42pでは脱出の方法を探るために、図書委員経験者の生徒がパソコンから利用者を探す場面があります。本来パスワード管理も含め職員が行う業務ですが、現状では図書委員会の生徒もカウンターでの貸し出し作業を行うことはあります。ただ生徒がその際に知りえた利用者の個人情報にはほかに漏らさないことは、現場では確認していることです。命のかかった状況での行動ですが、安易に貸し出し情報を目的外使用されたことは残念に思います」

(<http://gakutoken.net/opinion/appeal>)

3)「警察からの照会による利用情報の提供」『図書館の自由』vol.103、2019.2、p3

4)田中道昭『GAFA×BATH 米中メガテックの競争戦略』日本経済新聞社、2019

5)望月智之『2025年、人は「買い物」をしなくなる 次の10年を変えるデジタルシェルフの衝撃』クロスメディア・パブリッシング、2019

6) 広井良典『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社、2019

7) 高橋ユキ『つけびの村 噂が5人を殺したのか』晶文社、2019

8) 堀越英美『不道德お母さん講座 私たちはなぜ母性と自己犠牲に感動するのか』河出書房新社、2018

9) 『図書室の君へ』作詞：秋元康

「図書室の本棚の向こう側 そうなにか探してる君がいる」「ヘミングウェイなんて 読んだこともなかった 活字嫌いの僕なのに なぜかここに座っている」

「図書室の別々のテーブルで ぼくたちはただじっと本を読む」「ヘミングウェイ読んでほんの少しわかった 君と僕の性格は そう全く違うってこと」

歌詞のなかに「図書室」「ヘミングウェイ」が登場することで、7th『バレッタ』（2013.11.27 リリース）との関連性が、一部で話題となった。

『バレッタ』作詞：秋元康

「図書室の窓際で女子たちが声潜め会議中 ヘミングウェイを読みながら僕はチラ見した」

10) テレビ朝日系列で放送された。

「国内にもありますし海外にもあります」「自然にできたものですか—いいえ違います」「基本的にはお金を使うことはないと思います」などのヒントが示された。

11) テレビ東京系列で放送された。

ナレーションでは、「ちょっと地味？ いえいえ、あなたがそういうの好みだって わたし聞いちゃいましたよ」と紹介された。

宮田愛萌は、たとえば、下記のような読書に関する情報発信も行っている。

「私は本に取り憑かれているのではないだろうか。いつでもどこでもどんな時でも、本がないと落ち着かない。それも3冊は持ち歩きたい」

「日向坂46・宮田愛萌が心の拠り所にしていく文庫3選 大人になっても大事な親友」
『波』2019.11

(<https://www.bookbang.jp/review/article/593020>)

また、過去には、公式ブログで、以下のようなコメントを公開している。

「私はもともと本に関わった仕事に就きたくて 将来は出版社に勤めるか、ライターになるか、司書（図書館員）か 本屋さんになりたいな～ なんて思っていました」

『エイプリルフールじゃなくてバレンタインデーだよね??』

宮田愛萌公式ブログ 日向坂46公式サイト 2019.2.14

(本文中で参照した web ページは、2020年2月の時点で公開されていたものです)